

## 8. 全学的観点から見た今後の課題と展望

### (1) 評価対象科目について

今年 2011（平成 23）年度の学部の評価対象科目について、過去 2 年（平成 21 年と平成 22 年）度と全く同様の規則に従い、①10 名以下の科目、②オムニバス方式つまり複数の教員が担当する科目も学生による授業評価アンケート実施の対象とした。

大学院の評価について、昨年 2010（平成 22）年度から始めた方法で、つまり学部と同様に科目ごとに学生によるアンケート調査を行った。大学院の評価は、オムニバス方式も含めた科目を評価の対象とした。

今後の課題として、受講生の人数が非常に少ない授業科目にアンケート調査をすることの意義に懸念を持つ意見が出ている。この点について引き続き検討していかねばならない。

### (2) 調査項目について

#### 1) 学部の質問項目について

経年比較をすることを目的とし、本年度は昨年度の質問項目をそのまま使用した。

#### 2) 大学院の質問項目について

大学院の各科目対象の質問項目についても同様に、経年比較をすることを目的に、本年度も 2009 年度・2010 年度と同一の質問項目を使用した。

なお、大学院のアンケート調査項目に関して、実習系の授業を評価するに相応しいものに改善する必要があるとの意見があった心理学研究科には、FD 委員会が実施するアンケート調査項目は全大学院科目対象に統一した項目を引き続き用い、それに加えて心理学研究科独特の調査項目を加えるかたちをとるよう依頼した。

### (3) 評価結果データについて

学部の授業評価結果データについて、昨年度は「年度」のデータが欠けていたが、本年度は滞りなく「年度」「前期」「後期」の 3 つのセットで提示されたので、経年比較を順調にすることができたことは評価できる。

また昨年度の大学院の授業評価において、対象として含まれるべきではなかった聴講生もアンケートに回答したため、回収率が 100%を超えた結果が出たが、本年度はこの問題は解消された。

最後に、経年比較のための工夫である「変動値の表示」について、昨年度は大まかな変動のみ認知できる状態であったため、前年度からの増減は 1 つも拾うことができなかった。この問題を解消するため、今年度は表 I・8・1 のように、それぞれの印（◎・○・▼）の増加・減少の幅を狭く設定した結果、思いどおりに経年比較ができたことは評価される。



される ND 祭で卒業生の集いの場を設け、卒業生に教育総合評価アンケートの回答を依頼することを検討している。

文責：桐野 由美子（FD 委員長）